

平成 21年 5月 5日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520259

研究課題名（和文） タミル古代の英雄文学の再検討

研究課題名（英文） Reconsideration of Ancient Tamil Heroic Poetry

研究代表者

氏名：高橋 孝信 (TAKAHASHI TAKANOBU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：10236292

研究分野：インド語インド文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学文学論

キーワード：インド文学、タミル文学、サンガム文学、英雄文学、古代文学、インド古代、古典文学、詩論

1. 研究計画の概要

- (1) 紀元後 1～2 世紀を中心に作られたと思われる英雄詩、それを 400 集めた詞華集『英雄詩四百』を研究する。
- (2) その手始めとして、本邦にない関連文献を収集する。
- (3) 研究方法は、これまで個々の詩に後代付けられた添書の記述にある作者・称賛する英雄名などを、そのまま事実として詩本文を読んでいたものを、一旦作品とは別物として読むという作業を中心とする。
- (4) 古代の詩人名は恋愛文学にも出てくるから、それらも考慮する。

2. 研究の進捗状況

概ね当初の計画通りに進んでいるものの、以下の 3 点では当初と異なり、研究が一層広まることとなった。

- (1) 『英雄詩四百』には、古代社会の実際の姿が多く描写される。しかし、それらを正確に読み解くには、必ずしもすべての版本を必要とはせず、むしろテキストの精読が求められる。そこで、関連文献の収集に時間を割かないことにした。
- (2) 上に述べたとおり、英雄詩の理解には古代社会の理解が必要で、そのため単に『英雄詩四百』のみ精読するのではなく、関連事項が述べられる他の古代作品群もよく読む必要が生じた。
- (3) この作業を通じて、古代文学の作者に関しては、これまで考えられているより、はるかに仮託その他複雑な様相を呈していることが分かった。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

（理由）前項に述べたように、本研究は当初の予想よりはるかに広まりを見せ、そのためある意味ではまとまった成果の提示にはより時間を要する可能性が生じた。一方、訳文の一部はすでに刊行済みだし、「英雄詩」という呼称が適切かどうかについても、すでに論考を発表した。また、古代社会の理解については、博物学的知識を必要とするものの、着実にデータは集まっているし、また研究の方向性も見え始めた。

4. 今後の研究の推進方策

『英雄詩四百』の理解には、タミル古代の他の文献も視野に入れなくてはならない。そのため、個々の英雄詩の精読を目的としつつ、分からない部分（例えば服装、太鼓の様子など）は一応の訳語を充てておいて、これまでどおり、広く内外の文献を渉猟しつつ研究を進めていく予定である。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

高橋孝信、「文法以前 古典テキスト解釈の諸問題」、『インド哲学仏教学研究』、第 13 号、73-86 頁、2006 年、査読無。

高橋孝信、「プラムは「雑歌」か タミル古代文学のジャンル分け」、『万葉古代学研究所年報』、第 6 号、215-228 頁、2008 年、

招待論文。

高橋孝信、「「耕す」とは「殺す」こと？
タミル文化とジャイナ教の伝播」、『印度哲学
仏教学』、第23号、276-294頁、2008年、
招待論文。

〔学会発表〕(計3件)

高橋孝信、「南インド祈祷文学から考える
ムルガン神の憑依と宥めの儀式」第2回
万葉古代学研究所共同研究公開シンポジウ
ム、2007年10月7日、万葉古代学研究所、
橿原市。

高橋孝信、"Tolkappiyam Porulat ikaram and
Iraiyanar Akapporul : Their Relative
Chronology", Workshop: Towards an
internal chronology of theories in
Ilakkanam, 2008.03.0, フランス極東学院
(EFE0), Pondichery, India.

高橋孝信、「南インドの宗教事情」北海道
印度哲学仏教学会平成20年度例会、2008年
5月17日、北海道大学人文社会総合教育研究
棟。

〔図書〕(計1件)

高橋孝信、平凡社・東洋文庫765、『エット
ウトハイ 古代タミルの恋と戦いの詩』(訳)
2007年、345頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

一般書

高橋孝信、「タミル古典文学の世界」辛島昇
編『世界歴史体系 南アジア史3 南インド』、
山川出版社、2007、64-68頁。

ホームページ

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/indlit/tamil/index.html>